

道具と人間

柴田義松
(東京大学名誉教授)

すべての生き物は、まわりの自然と深くかかわって生きている。人間も同様だが、人間は特別のかかわり方をしている。自然にあるものを加工して道具を作り、その道具を使って自然に働きかけている。人間は、道具によってまわりの自然を大きく変えるとともに、自分自身の生き方も大きく変えてきた。

人間の人間らしさ(人間性)とは何かを理解するとともに、自分自身の生き方についても深く考えるような人間観を子どもたちに育てるうえで「道具と人間」とのかかわりを追究することは重要な意味をもつ。このように考えて、私は人間学研究会の同志(小原秀雄・岩田好弘その他)とともに「道具と人間」を基本テーマとするカリキュラムの開発を数年前から手がけてきたが、それがこの3月にシリーズ『道具と人間—人間を学ぶ総合的学習の勧め』小学校中学年と高学年プログラム、中学校プログラム(明治図書)の3冊として刊行されることとなった。

人間についてこのようにまとめた形で総合的に学ばせるという試みがこれまでにまったくなかったわけではない。もっとも有名なのは、アメリカのブルーナーが中心となって1960年代半ばに開発した「人間：学習コース, Man: A Course of Study」(略称MACOS)である。

MACOSが教育目標としたのは、「人間はなんとすばらしい種であるか—人間はいろいろなことを考えることができ、文化によって自分自身

の力を拡大し成長していくことができる」といったことの理解を子どもたちに与えてやりたい」ということであった。当時は科学技術革新の時代であり、人間の未来についてもかなり楽観的な見方に立っていたように思われる。

人間性への信頼は基本とならねばならないが、深刻な環境問題を抱える地球時代21世紀に生きる子どもたちには、もう少し違った人間観・世界観も必要とするのではないかと私たちは考え、次のような柱を立てて各冊の内容を構成することにした。

①人類は、道具を不可欠とする生活をすることによって人類となった。②道具と生活、その関係は歴史的に変遷する。③道具が発達して、人類はさまざまな地域に生活するようになった。多様な自然のなかで生活と道具、自然とのかかわりは多様になった。④道具が発達すると生活が複雑になった。生活が複雑になるとさまざまな新しい道具が生まれた。⑤道具は不要になり老朽化すると解体され、作り替えられ、廃棄される。⑥道具の変化は、生活を束縛し、生活・環境を破壊することがある。⑦道具の発達には、人間の精神文化の変化と結びついていた。

本シリーズの読者対象は主に小・中学校の教師だが、図版を多くして授業づくりや教材開発に直接役立つようにした。家庭科の教育にも深い関係がある内容なので、いろいろとご検討くださり、ご忠言をいただければ幸いである。

シバタ ヨシマツ

現場教師との協同による授業研究を通して学校のカリキュラム編成や教育方法の実践的研究に取り組んでこられた。日本カリキュラム学会代表理事、日本教育方法学会代表理事を歴任。近著に、「21世紀を拓く教授学」, 「学び方の基礎・基本と総合的学習」, 編著「道具と人間」全3冊(以上、明治図書), 「教育課程—カリキュラム入門」(有斐閣), 翻訳ヴィゴツキー「思春期の心理学」(新読書社)などがある。



平成17年度用小学校家庭科教科書 「わたしたちの家庭科」の 改訂にあたって

はじめに

平成14年度から、新しい教育課程が実施となり、各学校、先生方におかれましては、新教育課程・完全学校週五日制に対応するためのご研究や実践に取り組み、日々ご精励のことと存じます。

各学校で使用される教科書につきましても、私達著者は、新学習指導要領について深く研究を重ねるとともに、各地域の中に生きる児童を頭にえがきながら「生き生きと家庭科を学ぶ」姿を目指して編集してきました。

現在、各学校や地区では、すでに平成17年度から使用する新しい教科書についてのご検討がすすめられていることと思います。

平成17年度用の新教科書は、平成14年度から完全実施された新教育課程、新学習指導要領のもとで使用される2巡目のものとなります。

平成14年度用(現行本)教科書編集時からすでに数年を経ました。この間、全国の多くの先生方からは教科書に対する貴重なご意見やご指摘を頂きました。改訂するにあたり、これらを踏まえるとともに、児童の学びのようすを基にして、さらに社会や時代の変化に一層対応する能力を育てることを目指して検討を重ねました。幸い、多くの全国の先生方にご支持いただいておりますことを自信とし、現行本のよさを生かしつつ、更に新しい視点を盛り込みながら編集いたしました。

以下に、平成17年度用教科書編集の方針、特に留意したことなどについて記してみることとします。

1. 新教科書編集の基本方針

全ページにわたり、以下の視点を重視し、改善を図っています。

- 児童の「関心・意欲・態度」に注目し、主体的な学習への取り組みができるようにすること
- 学習したことを一人ひとりの児童なりに家庭生活に生か

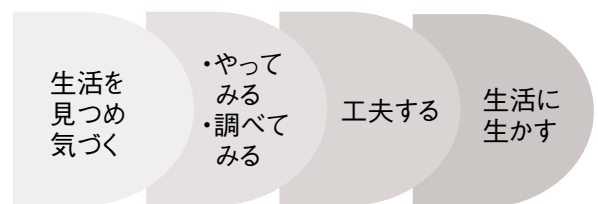
すことができるような「題材の構成」や「学習の展開」を工夫すること

- 基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得の上に応用的・総合的な学習を積み上げられるように、学習の系統性を重視すること
- 人や環境との共生について理解を深め、身近なところから考え実践的な態度を育てること
- 「発展的な学習」を検討し、児童一人ひとりの興味や関心に応じて深めることができるようにすること
- 教師の授業へのイメージや指導が容易になるように、紙面や題材の展開を工夫すること

2. 教科書改善の特徴

①主体的に工夫して学習をすすめるとともに、楽しみながら学ぶ観点から

全題材ともに、ものや人とかわりながら、児童の「思い」や「気づき」から出発できるように留意しました。



児童が自ら学習をすすめるためには、まず、自分の生活に関心を持ち、見直してみることよっての気づきが重要です。その上で、実行したり調べたりすることが可能となります。

実行したことや調べたことをもとにして、さらに工夫をするためには、教師や友達からのヒントが必要となり、その観点から紙面の構成を工夫しました。

②学習の系統性に注目して、基礎的・基本的な事項を身につける観点から

実習や製作においては、児童の思考の流れに沿って、手順や図解を示すことが求められます。



櫻井 純子

女子栄養大学教授
元文部科学省主任視学官
著者代表

新教科書では、教科書を開いて手順を追いながら学ぶことによって、児童一人ひとりの基礎的・基本的な技能が身につく、途中で疑問に思うことなども、「キャラクター」という学習案内人のヒントによって、児童自ら知識としての理解が深められるようにしました。

構成や配列については、教科「家庭科」の特徴を踏まえて、その系統性に特に注目して構成しています。たとえば、伝統的に日本人の食事として根づいている「ごはんのみそしる」を食事の基本単位としてとらえ、この「ごはんのみそしる」をまず早期に学習させます。その上で「ごはんのみそしる」におかずを加えることによって、1食分の食事が成り立つことに気づかせ、その後に学習する食物に関する内容に興味・関心をもって、学習を広げていくことができるような構成にしています。さらには、他教科で学習する「稲の学習」や、「総合的な学習」などの、各行事に沿った取り組みに発展させることも可能となります。

③人や環境と調和を図って生活する能力を育てる観点から

21世紀を担っていくことになる児童にとって、人と人とが共生する社会、人と環境とが相互にかかわりあいながら生活する社会が重要であることは言うまでもありません。

児童が、これからの社会において、家庭科の学習を通して、どのような視点を持ち、どのような対応が求められるかを明確にし、授業に取り組んでいくことが必要となります。そのためには、まず「自分の生活を見つめ、自分でできる一つひとつの行動が環境保全や共生につながっている」ことをしっかり自覚させることが大切でしょう。

授業においては児童に、現実を見据えた中で生活の課題に取り組む実践していこうとする意欲を育てる工夫が必要となります。

教科書には多くの事例を掲載し、共に生きるということとはどのようなことか、環境に配慮するということとは何かなどを考えていく手がかりとなるようにしました。

さらに、これからの社会は、児童が自分の考えをもって

ものや金銭とかかわることができることがますます重要と なってきます。

小学校高学年になりますと、児童が自分で文房具を購入したり、日常の買い物に参加する場面も増えてきます。その場面場面では、児童は消費者としての意志決定を迫られます。意志決定をすることはどういうことか、どのような情報や行動が求められるのかを、具体的な例で考えられるように教科書の場面構成を工夫しました。

たとえば、教科書では「欲しいものがあるとき、どうすればよいだろう？」から始まり、計画→選択→購入のプロセスが、明示されています。あわせて、「ものの使い方」としては、「衣服の一生」を例にして、児童が自分の生活の中での持ちものの見直しをすることによって、計画的なものの使い方に取り組めるようになっていきます。

④教科書で授業がイメージできる観点から

本来、授業は、その地域・学校・児童の実態を踏まえて作られた計画の下にすすめられるものですが、学校週五日制の影響などで日々の時間の管理が難しくなった等、耳にすることがあります。

また、子ども一人ひとりを見とり、その特性を生かした学習指導をすることも一層求められています。これらの状況の中ではますます、先生方にとって授業がしやすく、児童にとっては学びやすい教科書が必要となってきます。

そのため、改訂にあたっては、紙面の中に、学ぶ内容、学ぶ手だて、学習の展開、そして学んだことが生活に生かせることを示して、教師・児童の双方が授業について実感できるように工夫をしました。

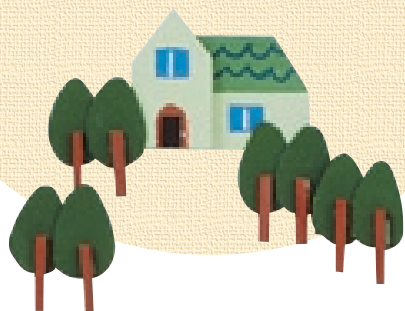
系統性をもった構成や配列は勿論のこと、教科書の紙面によって学ぶ内容が容易にイメージできるようになっています。

この教科書によって児童が家庭科を学習することにより、確かな生活力を身につけることができる、と著者一同は確信しています。

教育の目

[特集]

教科書と授業



長井
梢

生活に生かす力を 身につける 授業の工夫



ナガイ コズエ

横浜市生まれ。横浜市教育センター研究員時代、「調理学習における科学的能力の育成」、「下着の着衣に関する研究」の論文発表。横浜市教育委員会指導主事(小・中・高の家庭科担当)、横浜市立東中田小・白幡小学校校長、横浜国立大学講師、学習指導要領(小学校家庭科)作成協力者、全国小学校家庭科研究会副会長、横浜市、神奈川県家庭科研究会会長を歴任。著書に「家庭科教材研究の仕方」(教育開発情報センター)、共著「小学校家庭科2食物」(明治図書)、「新しい家庭科よい授業の条件」(東洋館出版)ほか。

◎教科書で課題を発見

何気なく日々を過ごしている子どもにとって、家庭生活を意識して見つめさせれば、様々な発見や驚きがあるはず。生活のしかたは、それぞれ多様ですが、人間が生活をするということの基本は変わりなく、家族が協力し合って生活をしていることに気づかせたいと思います。

そのためには、教科書に書かれている内容を通して、現実の生活を見ていけば、知らなかったことや疑問に思うこと、やってみたいことなどが見つけられ、内容の理解や実践していくうえで、大きな支援となることは言うまでもありません。

家庭科の教科書は、経験の少ない子どもに学ぶ目を育て、課題を「見つける」大きな手がかりとなる役割があります。

◎子どもの「思い」を課題に

生活を見つめて、見つけたことに対して、子どもは、「どうしてかな」、「調べてみたい」、「やってみたい」、「作ってみたい」、「こうしたい」など、いろいろな「思い」をもっています。

その「思い」は、軽い思いつきであったり、単なるひらめきであったりして、明確な課題とならないものもありますが、これらの漠然とした子どもの「思い」を大切に取り上げ、まとめや整理をさせたりしながら課題がつかれるように支援していくことが大切です。

しかし、子どもの「思い」は自分の力を超えて広がり、できると思い込んでしまう場合があります。これを「子どもの主体性」、「個を生かす」と思い込み、基礎的・基本的な内容を十分指導ができなかったり、時間がかかってしまうこともあります。

この場合の重要な役目をするのが教科書であります。調理や製作などの手順や作り方、材料など、教科書を見ながら自分の「思い」と比べ、見直していくようにします。また、住まい方や家族、環境、消費などにおいては、気づきにくい内容のため、教科書が課題発見に大いに役立つのです。

◎自分の生活へ生かす力

現代の生活は便利で、特に生活に関する知識や技能を習得しなくても困らないと考える風潮も見られます。

小学校家庭科では単に技能だけではなく、学習によって身につけた力を自分の生活に生かしていくことです。そのなかで、家族やまわりの環境、人々とのかかわりなどに生きて働く力となって実践していくことができるようにすることです。人として生活する確かな学力として身につけ、自分の生活上の課題に自ら向かい、実践できるようになることです。そして、子ども自ら生活を見つめ、見つけたことに「思い」を持ち、確かな課題として必要な基礎的・基本的なことがらを獲得していこうとする意欲的な態度を育てていくことが大切だと思います。

「思い」や「見つけた」ことを学習課題にしていく授業の工夫（例）

針と糸を使って作ってみよう

〈見つけたこと〉

- ・いろいろな用具がある。
- ・ぬい方もいろいろある。
- ・ボタンもついている。

〈思ったこと〉

- ・針や糸を使ったことがあるので、早く作りたい。
- ・マスコットみたいなものを作りたい。
- ・ビーズもつけたい。
- ・自分のワッペンを作りたい。
- ・作れるかな。
- ・やさしいのでいい。

〈課題をつかむための支援〉

- ・教科書をよく見てわからないところ、できるようになりたいことを見つけるようにする。
- ・作りたいものを教科書、実物見本などを参考にして決めるようにする。
- ・用具の使い方を調べる。
- ・教科書、実物見本を見ながら、縫い方を調べる。
- ・作る時間、材料、目的など必要な事項を知らせる。

〈主な課題〉

- ・初めてなので、フェルトでワッペンを作る。
- ・ペンケースを作ろう。
- ・ミッキーのハンカチを使ってティッシュペーパー入れを作ろう。

- ・作る時間に合わせて計画を立てよう。
- ・場所によって糸の色をかえてみよう。
- ・ボタンがついた小物入れを作ろう。
- ・糸で試しに作って大きさを決めよう。
- ・玉どめ、玉結びを練習しておこう。
- ・色の組み合わせを工夫しよう。

◎教科書の効果的な活用

教科書は、子どもが自分の課題のもとに学習を進めようとしたとき、調べる手引きの一つとして最も信頼できる道標みちしるべの役目があります。ひとりでやってみる場合も、教科書で材料や手順、作り方を調べることができます。

また、基礎的・基本的な知識や技能においても興味・関心をもって、自ら習得しようとする意欲も高まります。さらに、生活のなかで実践していく上でも確かめたり、応用、発展させたりすることもできるのです。

しかし、単に教科書の内容を教えるのではなく、子どもや地域の実態を十分に把握し、効果的に活用していくことが、指導の工夫とともに重要と考えています。



ネームプレート

マスコット

小物入れ

ティッシュペーパー入れ

平成17年度用小学校家庭科教科書に掲載作品例

教育の目

[特集]

教科書と授業



家庭科の学習を豊かにするために教科書の使い方を工夫しよう

高木直



タカギ ナオ

大阪府生まれ。共立女子短期大学助手、山形大学教育学部助手を経て、現在山形大学教育学部教授。著書に共著「小学校家庭科指導の研究」(建帛社)、共著「生活を創るライフスキル 生活経営論」(建帛社)、共著「米(食と農)からはじめる総合的学習—消費者の視点から—」(かもがわ出版)、共著「家庭科の授業をよむ」(ドメス出版)、共著「中学校家庭科教育へ向けて 授業を拓く」(教育図書)ほか。

はじめに

新学期を迎え、子どもたちは気持ちも新たに新しい教室で新しい教科書を手にし、これからの学習に目を輝かせていることでしょう。このような未来を背負った子どもたちの姿にふれると、教科書を使う人、作る人、検定する人の責任の重さを感じずにはおられません。

1. 教材としての教科書

教育目標を効果的に達成するために、これまで各種の教材や教具が開発されてきました。教材は、子どもたちが自分を取り巻く世界を認識していくときに媒介となって働くものすべてを指していると言えますが、とりわけ、意図的・計画的に教育がなされる学校においては大きな意味もっています。特に教科書は教材として最も一般的であり、重要なものであることはいまでもありません。

しかし近年では、子どもたちのまわりには教科書以外の情報源がさまざまに存在し、居ながらにして世界の最新の情報キャッチすることができるようになりました。そのことによって、学校の機能や教科書のもつ意味が、情報量の少なかった時代とは異なり、改めて教科書をどう使うか考えていく必要が出てきたと言えるでしょう。

2. 検定教科書の限界

ところで、教科書が日の目を見るには文部科学省の検定を通らなければなりません。学習指導要領の内容を不足なく取り上げているか、範囲を逸脱していないか、表記に誤りがないか、不適切な表現はないか、特定の主義や信条に偏っていないか等、細かい項目にそってチェックされ、不適切と判断された部分は修正が求められ、場合によっては不合格となります。では、検定に合格し、教師や子どもの手元に届いた教科書は、間違いのない安心して用いることのできる理想的な教科書と言えるのでしょうか。仮にそうであるとしたら、検定の一部に行き過ぎがあったと判決が出された「家永教科書裁判」は起こらなかったでしょう。

また、1996年の高等学校家庭科教科書4冊不合格の件などは、検定の在り方にまで議論が及び、検定制度にさまざまな問題が含まれていることを露呈した例と言えるでしょう。

教科書は、日本中の全児童・生徒が手にするものである

だけに、公正さや中立性が求められますが、限界があるのも事実です。そのことについては中内は、「…その在り方をめぐって、各時代の為政者や知識人が深く関心を示してきた教材である。教科書に対して知識人だけでなく、政治指導者層の関心が高かったのは、その素材になる文字文化が官僚制(広い意味での)に結びついて発達してきたからにはほかならない」¹⁾と述べ、鶴田は「教科書検定制度は、記述内容に間違いがないようにするための点検というより、国家の教育政策を浸透させていくための制度であることは、言うまでもありません」²⁾と指摘しているように、検定制度自体、ひいては学習指導要領の内容自体にそのときの為政者の意図が反映していることは否めません。

3. 十分な学習計画の下での教科書活用を

前述のように教科書は、検定によって編著者の意図が全て通るとは限らず限界がありますが、多くの研究者や教育者によって検討が重ねられ、時間をかけて作られた、他に類を見ない重要なものでもあります。しかも、子どもたち全員に行き渡る教材ですから限界を十分理解した上で有効に使うことが大切です。

実践報告会や研究集会で授業実践を見せていただくと、すばらしい実践に出会うことがたびたびあります。それらに共通していることは、その単元の学習(教育)目標がしっかりしていることや、有効な学習方法を用いて子どもに課題を持たせ、その課題への取り組みせ方が適切であることなどを挙げることができます。そんな授業では、子どもたちが目を輝かせ、心から「わかった」「おもしろい」「もっとやりたい」と思える授業になっています。教科書には、大人側が定めた子どもに知ってほしい内容、覚えてほしい内容、できるようになってほしい内容が効率よく盛り込まれています。しかし、それらは必ずしも子どもが学びたい、知りたい、やってみたいことと合致しているものばかりとは限りません。また、たくさんの情報が記載されているがゆえに問題解決学習や討論などをさせにくい場合も起こってきます。教科書にはどうしても正しい答え、あるいは正しいと思わせるような答えが用意されており、読んだだけでわかった気になってしまう危険性もはらんでいます。教科書が中心になると、自分で問題を発見したり、考える力を育てにくくなってしまいます。

4. 生活実感の伴う学習を

言うまでもなく、教師は目の前にいる子どもの実態をみながら授業の方法を考え、教材を選択していく必要があります。特に家庭科は、子どもたちの生活を学習対象にし、自分の生活を切り拓いていく力をつけようとしています。子どもたちには個々の生活があり、地域の生活文化の中で暮らしています。しかし、教科書は全国一律に使用するために、地域色を出したり、個別の事例を掲載するには限界があります。子どもの生活認識は教科書にある架空の家庭や地域のことではなく、自分の生活であり、自分がどう意思決定し行動するかが重要なのです。そのためには、教科書をどう使い、他の教材をどう活用していくかはとても大切なことであり、教師の力量を大いに発揮するところとなるでしょう。

引用文献

- 1) 中内敏夫著『新版教材と教具の理論』あゆみ出版p.23,1990
- 2) 鶴田教子著『家庭科が狙われている』朝日新聞社p.133,2004



平成17年度用小学校家庭科教科書の紙面例

家族とのかかわりの中で自らの生活を工夫する 子どもの育成をめざして

岐阜県 岐阜市立加納小学校 吉村 良

はじめに

本校は歴史の町の中にあり、学校は加納城の跡地に建てられています。地域の人たちは、学校に対して理解と協力を示し、「わが学校」として誇りをもっています。また、三世帯家庭が多く、約七割の子どもの祖父母と同居しており、とても落ち着いた地域であります。こうした地域の特色から、次のような子どもを育てていくことが大切であると考えました。

家族とのかかわりの中から課題を見つけ
その解決に向けて自ら工夫していく子ども

1. 研究内容

具体的には、次のような研究内容としました。

- (1) 家族とのかかわりの中で自然に学ぶことができる指導構想のあり方
- (2) 指導のねらいと子どもたちの課題追求の方向が一体化する授業展開のあり方

以下、研究内容(1)、(2)について「あたたかいごはんとみそしるを作ろう」(5年生10月~11月実践)で述べてみたいと思います。

2. 研究内容(1)について

題材を通して、家族とのかかわりの中で学ぶことができるように、どの題材でも次のような四つの段階を仕組みました。

- A：生活見つめから入る題材との出会い
- B：子ども自らが考える学習計画
- C：実習を通しての課題追求
- D：家庭生活に生かす場の設定



A：題材の入り口では、題材で扱う内容や素材について家庭で取材をし、そこから題材との出会いができるようにしました。子どもたちは「家ではこうじみそを使うよ」「わたしはおばあちゃんが喜んでくれるみそしるが作りたい」という家族の好みをつかんだり、題材への願いをもったりすることができました。

B：子どもたちに題材の見通しをもたすことができれば、主体的な学びが期待できます。そこで、子どもが自分の出口の姿をイメージし、目的意識をもって計画的に活動できるための工夫として、掲示資料(題材計画)を常設するとともに、学習の足跡にしていきました。



C：「お母さんがやっているみたいに、大きさをそろえて切ってみよう」といった具合に、家庭生活を想起しながら課題を追求させたり、「だから、おばあちゃんは固い実から順にゆでていくのか」といった実感をともなった気づきをさせました。(研究内容(2)にて後述)

D：題材の最後の時間には、生活に役立つ実感を味わわせる振り返りの授業を位置づけました。子どもたちは「歯の悪いおじいちゃんのことを考えて、ゴボウをやわらかくゆでてくれてうれしかったよ」といった家族の言葉から、家族のために役立った喜びや、自分の工夫したことが認められた充実感を味わうことができました。

あたたかいごはんとみそしるを作ろう 全9時間	
第1時(ごはんのみそしる)	家庭からの取材結果をもとに交流し合い、ごはんのみそしるのよさが分かる。
第2, 3時(米飯)	加熱によって、米がごはんになることが分かり、ごはんのたき方の基礎的な技能を身につける。



第4時 (みそしる) みそしる作りには、欠かせないポイント(手順、みそや水の分量、だし)があることが分かる。
第5時 (みそしる) 材料にあった実の入れ方や切り方ができる。
第6時 (ごはんのみそしる) ごはんのみそしるの調理にかかる時間を明らかにし、2つの調理を同時にするための計画を立てることができる。
第7,8時 (ごはんのみそしる) できあがり「ほかほか」かつ「あったか」になるように2つの調理を同時にすることができる。
~~~~~ 家庭で実践する期間を1週間ほどとる。 ~~~~~
第9時 (ごはんのみそしる) 家庭で作ってみたごはんのみそしるが家族から喜ばれることのよさを味わい、これからも進んで調理していこうとする。



実物見本  
A：「ねぎとじゃがいもを均等に切り、同時にお湯の中に入れて7～8分ゆでたもの」  
B：「じゃがいもがほほゆであがりそうになってから、さっとねぎを入れたもの。大きさに多少のばらつきをもたせてある」

子どもたちのつぶやきから

「Aのねぎはグチャグチャだけど、Bはシャキシャキしていておいしそう」「お母さんの言う通り、実を入れるタイミングが大事なだね」「切る大きさがそろっていないと、ゆでたときに固さに違いが出てくるね」

自分たちが家庭で行った取材結果と教師の資料提示によって、家庭生活を想起しながら、実をゆでる実習の見通しをもつことができました。これらの子どもたちのつぶやきを類型化し、「実を入れるタイミング」「実の大きさ」というキーワードを板書し、実習に向かわせました。Y兄は、「だいこんがやわらかくなってから、ねぎを入れよう」という見通しをもち、だいこんを取り皿にとって、はしでさしながら固さを確かめ調理をしていました。このように、具体的な課題追求の視点であるキーワードをもとに実習をさせることで、子どもたちは多様な活動を生み出しながら、ねらいの実現に向かっていくことができました。

**おわりに**

家族とのかかわりを大切にし、家族の中で学ぶ場を題材指導計画に位置づけたことによって、子どもの働きかけに家族が応え、家庭の仕事を通してふれあいが多くなり、家族の一員としての自分に気づく姿へと変容していきました。また、「キーワード」を設定したことで、教えることと考えさせる内容が明確になり、ねらいの実現に迫る実践的・体験的な活動を展開することができました。

**3. 研究内容(2)について**

家庭科は実践的・体験的な学習活動を大切にしていますが、活動を通しての子どもたちの学びが浅く、活動をしているだけに終わってしまうことがあります。それは、家庭科の学習内容には多様な価値があり、追求方向がズレやすいことに起因しています。そこで、単位時間の授業では、どの子どもも本時のねらい(追求すべき方向)に向かうための鍵となるものが必要となります。それを「キーワード」として位置づけ、多様な活動を保証しながら、ねらいからズレることなく追求できるようにしました。

Y兄は「あたたかいごはんのみそしるを作ろう」の5時間目までに、家族全員の実の好みを取材してきており、そこから「おいしいだいこんのみそしるが作れるようになりたい」という願いをもちました。一方で、第5時のねらいである「材料にあった実の切り方、入れ方」については、母親から「固いものから順にゆでるとよい」ことを聞いてはいたものの、具体的な見通しはあまりもてていないという実態がありました。そこで、課題を把握する際に、次ような2種類の実をゆでた実物見本を見せ、なぜそうなったかを考えさせました。

# ものやお金を大切にすることの育成

## — 金銭にかかわる活動の場の工夫を通して —

小学校家庭科研究会

### はじめに

現在、子どもたちの身の回りには、ものやサービスが溢れ、お金さえあれば欲しいものがいつでも手に入ります。また、ものが豊富にあるだけでなく、どんどん購買意欲をかき立てる新商品が開発されるため、ものを大切にせず粗末に扱ったり簡単にものを捨てたりしています。各家庭における、ものやお金に対する価値観は多様化しており、一概に一定の価値観にあてはめでの学習を展開することは、かなり難しい時代です。しかし、このような時代だからこそ、ものやお金を大切に、有効に活用していくための学習を行うことは、これからの社会の中で、人間として自立して生きていく力を育てる上で大変重要なことだと思います。

### 1. 研究の基本的な考え方

#### (1) 子どもの実態

現在の子どもたちの大きな特徴として、指示されたことはできますが自ら進んで考えたり、行動したりする力が不足しています。日常の学級生活の中では、自分の持ちものは大切に扱っていますが、使った道具の後かたづけが不十分であったり、たとえ自分のものであっても手元から離れると拾得物として発見されても見向きもせず、ものを大切に取り扱う気持ちが薄くなっています。また、目新しいものを次々に買ったり、後のことを考えずに無計画に買ったりしている子どもも見られ、お金の大切さをあまり意識していない傾向も見受けられます。

#### (2) めざす子ども像

- ・ものやお金を大切にすることの子ども
- ・ものやお金の価値が分かる子ども
- ・ものやお金を計画的に使う子ども

#### (3) 研究内容

家庭科の学習や特別活動の時間において、自分の消費生活を見つめ直す活動やお金にかかわる活動の場を工夫していきます。そうすることによって、子どもは、金銭に対して関心を示すようになり、ものやお金を大切にしていこうと考えています。

### 2. 学年の系統性

3年	「お金体験ゲーム」を通して、生活を支えるお金の流れを理解すると共に、お金を計画的に使う必要性に気づいて、お金を上手に使用しようとする子どもを育てる。
4年	「ミニ労働体験活動」を通して、労働と金銭の価値を実感すると共に、自分の限られたお金(おこづかい)を大切に有効に使用しようとする子どもを育てる。
5年	「リサイクルショップでの換金模擬体験活動」を通して、自分の消費生活を見直し、物を大切に扱おうとする気持ちを育てると共に、お金を計画的に使用しようとする子どもを育てる。
6年	プリペイドカードとお金の長所・短所を比較し、討論する活動を通して、それぞれの長所や短所を知ると共に、プリペイドカードやお金を計画的に使用しようとする子どもを育てる。

### 3. 実践例

第5学年「見つめよう 私の住まい方  
～不用品すっきり大作戦～」

#### (1) 題材の目標

- ・身の回りの持ちものを見直すことにより、これからのものの使い方や買い方に生かそうとする。(関心・意欲・態度)
- ・地域や環境を考えた生活のしかたを考え、消費者としてできることを工夫する。(創意・工夫)
- ・身の回りや住まいの清潔に関心を持ち、適切な整理・整とんやそうじができる。(技能)
- ・適切なごみの処理のしかたや出し方を知り、不用品の活用の方法を理解する。(知識・理解)

#### (2) 計画(全8時間)

第1次：自分の身の回りを見つめる…②(本時)

第2次：整理・整とんやそうじ、ごみの出し方…⑥

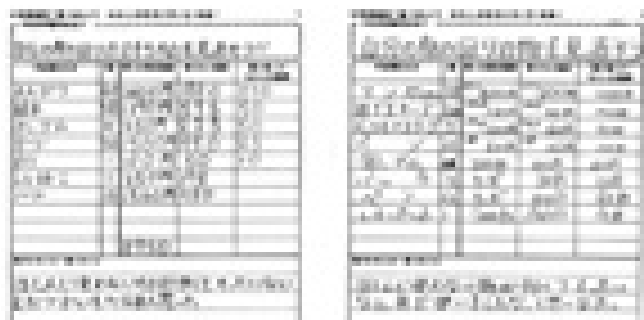
#### (3) 学習活動の実際

1) 「消費生活を見つめ直す活動」において



不用品をリサイクルショップで換金する模擬体験活動

事前に家庭で身の回りの持ちもの調べをさせ、それらが「自分にとって必要か」を考える活動を設定しました。すると「たくさんありすぎて使わないものがある」「以前は必要だったけど、今では必要でなくなった」などの意見が出され、自分の持ちものを見直すきっかけができました。また、必要でなくなったものの購入価格をプリントに書き出して、計算させました。金額を合計させると、子どもたちは「いらないものがたくさんあるね。」「こんなにお金を使っていたんだね。もったいないな。」と不用品の多さや金額の高さに驚きの声をあげていました。学習後の感想には「もったいない。」「みんなが持っている欲しくなるけど、これからはがまんも必要だ。」「必要なものだけ買おう」などと書かれていました。

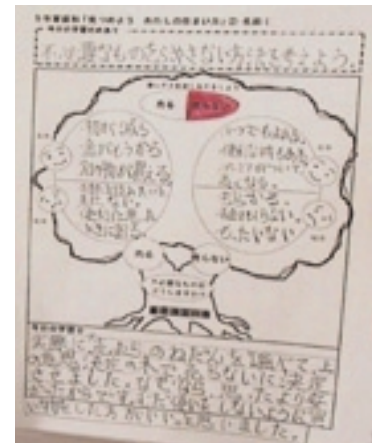


## 2) 「金銭にかかわる活動」において

「不必要なものを増やさない方法を考えよう」をめあてに、子どもたちが持ち寄った不用品の実物をリサイクルショップで換金する模擬体験活動を仕組みました。このショップで、自分が購入した価格や買い取ってもらいたい価格と買い取り価格との差に愕然とする子どもたちが多くいました。

次に、一人一人に、その不用品を売るか売らないか、「意思決定の木」を用いて考えさせました。「意思決定の木」とは、売る・売らないのどちらについても長所・短所を考え、最終的に売るか売らないか判断するという思考過程を通して、自分の意思を決定していくものです。このように、売るか売らないか葛藤場面を仕組むことで、物の買い方を見つめ直す活動につなげていきました。この換金模擬体験活動を通して、子どもたちは、不必要なものを増やさないためには、ものを買うときに自分の生活を見つめ、必要かどうかをよく考えて買うことが大切であることを実感したようです。

さらに、整理・整とんが不十分だったために、不必要な買いものをした経験を掘り起こし、次時の整理・整とんの学習につなげました。



## おわりに

今回の授業を通して、子どもたちの生活にお金に関連づけることができ、子ども自身がものやお金を大切にしようとする意識を持つことができました。このように、小学校教育課程(学級活動・家庭科)の中に金銭を題材にした3年生から6年生までの指導計画を作成し授業検証したことは、今まで教育現場で金銭に関する指導について、系統立てられたものはなかったという点で意義深いものと考えています。(文責：開隆堂編集部)

# 平成17年度用「わたしたちの家庭科5・6」は、児童の「思い」や「気」 “生活に生きる確かな力を身につける”

## 主体的な学習への取り組み

●児童の「思い」や「気づき」からはじまって、課題意識をもって学習に取り組むことができます。また、学習したことを自ら振り返り、生活に生かしていく手だてが示されています。

### 調べてみる



みそしるをおいしく作るくふうを家族に聞いてみよう。

教科書 p.38

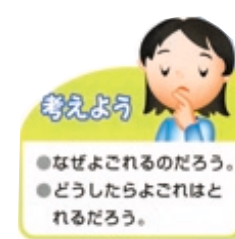
### やってみる



どこを、どのぬい方でぬったらよいかを考えてやってみよう。

教科書 p.34

### 考えてみる



●なぜよこれのだろう。●どうしたらよこれはとれるだろう。

教科書 p.41

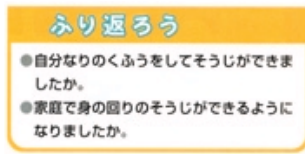
### 話し合ってみる



買った物をどのように使っているか、見直してみよう。

教科書 p.72

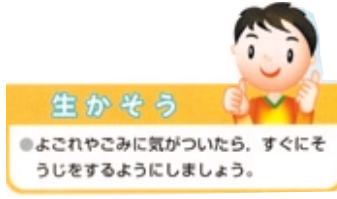
### 振り返ってみる



●自分なりのくふうをしてそうじができましたか。●家庭で身の回りのそうじができるようになりましたか。

教科書 p.45

### 生活に生かす



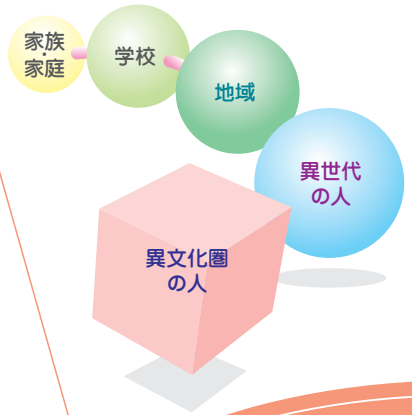
●よこれやごみに気がいたら、すぐにそうじをするようにしましょう。

## 人との共生・

●21世紀の課題ともいえる、人と人がたいくことや、環境にかかわる問題への取った取り組みができます。

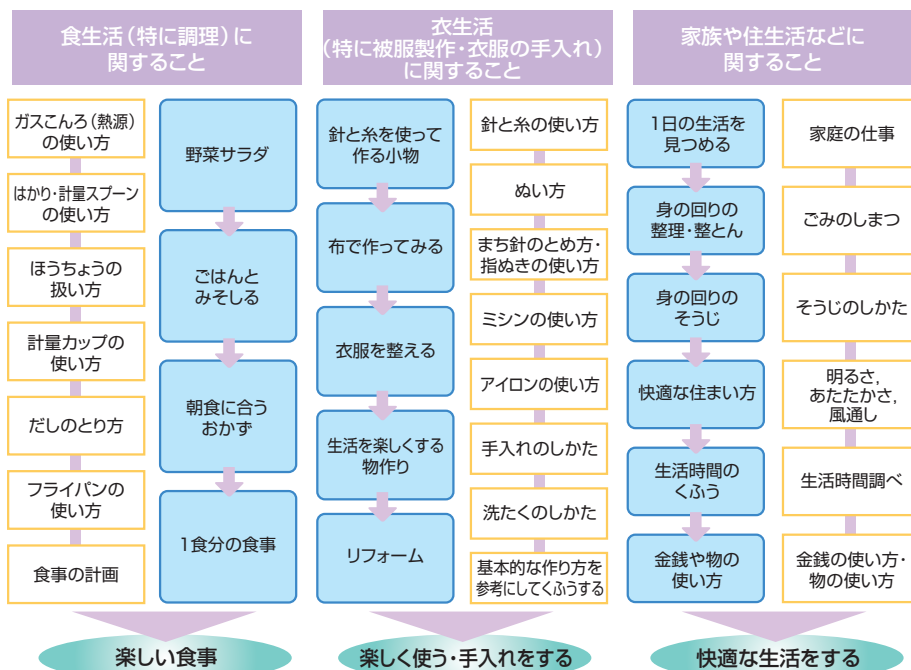
### 人との共生

●ふれあいの輪を広げよう



# 楽しく 家庭生活

●「基礎的・基本的」な知識や技能の習得からステップアップしていくことができるように、実習や製作題材の選択・配列を工夫して、2学年を通して学習が系統性をもってすすめられます。



## 「基礎・基本」と系統性

●それぞれの学習に深く関連して、**発展**として適切な箇学習したことが児童個々の学習を深めていくことがで

●ごはんのみそしるの学習を深める

**発展** みその種類や作り方を調べてみよう (教科書 p.39)

●快適な住まい方を考えよう

**発展** 環境を考えた住まいについて調べよう (ソーラーシステム) (教科書 p.49)

●地域とのつながりを広げよう

**発展** 地域の活動に参加 (教科書 p.95)

## 発展的な学習

づき」を大切にし、

# 教科書

として、特に以下の点を重視して編集しました。 編集部

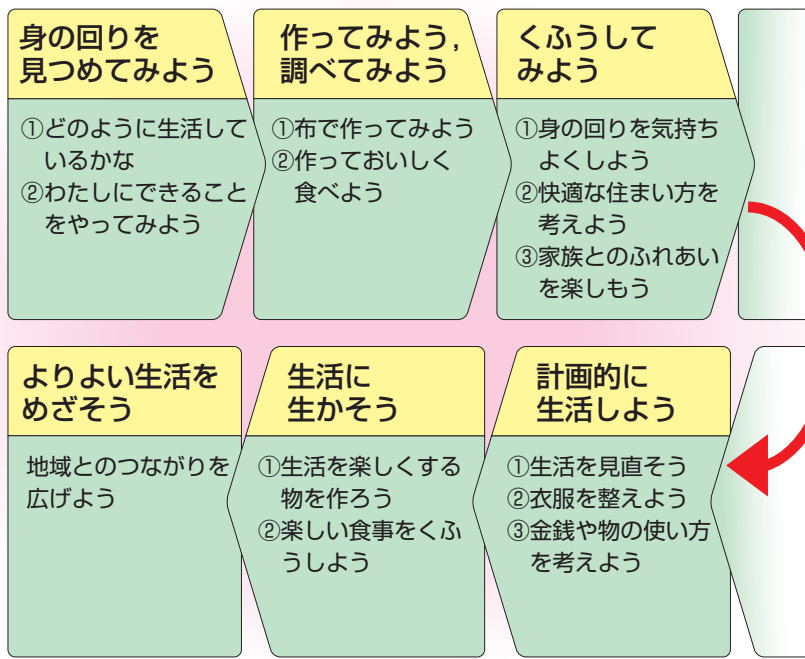
## 環境とのかかわり

がいに支え合い、つながりながら生活して  
り組みなどについて、児童の発達段階に



## 「題材の構成」と「学習の展開」の工夫

●指導時間数や学習の系統性を重視した構成や配列にしておりますので、  
児童の思考の流れにそって、学習が展開できます。



# よりよい をめざして

●授業がイメージしやすく、実習や製作の流れがわかりやすいように、見開き  
ページの示し方、実習や製作の手順の示し方を工夫していますので、無理なく  
学習がすすめられます。

する内容を、授業時間数も考慮し  
所に適度に取り入れていますので、  
興味や関心につながって、さらに  
きます。

●生活を楽しむ物を作ろう

**発展** ファスナーつき小物入れ  
模様をつけよう (教科書 p.81、89)

●楽しい食事をくふうしよう

**発展** 野菜のに物 (教科書 p.87)

●衣服を整えよう

**発展** Tシャツと毛のセーターは同じ洗ざいを  
使っているのかな (教科書 p.68)



## の取り上げ方

## 紙面の工夫